大東文化大学経済論集　84－11，2005.3

ペティの聖書人口学

馬　場　宏　二

2004年９月29日～10月27日

主題は、ペティ（Sir William Petty 1623～1687）の諸作の中では小著の、そのまたごく一部である。聖書の記述に依拠しながら世界人口の歴史を推計してみせる奇想天外な試みである。ペティの異能ぶりを示す文章の代表かも知れない。

もともとペティを特に勉強したことがあるわけではない。ただ、しばらく前から、ペティ→マーチン（Henry Martyn 1665～1721）→マカロック（J. R. Mc CULLOCH 1789～1864）→マルクス（Karl Marx 1818～1883）の継承関係が気になってきた。マーチンからスミス（A. Smith 1723～1790）への継承関係が明示できれば、ペティ→マーチン→スミス→リカード（David Ricardo 1772～1823）→マルクスと、経済学の本流の系図を描き得る。ところが、ペティ→スミスの線を描くにもひと苦労要する上に、マーチン→スミスとなると、何とか明示したいと考えているのに、実証的に描くことは当面不可能である。その代わりに、ペティ・マーチン→マカロックの線は簡単に描け、これはこれで改めて強調するに足るが、今度は、ペティとマーチンを評価し吸収したマルクスが、明らかに吸収経路にあったマカロックに、悪罵以外の評言を投じたことがない。

この奇妙に捻じれた系図を、経済学史にシロウトの目で洗い直してみようというのが狙いだった。だがそのためには、出発点に当るペティの説について多少は知識を持たねばならない。主題の小著はこの、遅れ馳せのペティ復習のなかで見つかったものである。

１．著作名の特定

不思議なことに、この著作の名を掴むこと自体が案外厄介だった。マルクス『経済学批判』が、商品論史中のペティ論への註[1]の中でこの小著を挙げている。他にこれを論じた研究を読んだ記憶がないのだが、マルクスの挙げ方では書名を特定し切れない。他方、邦

訳はなく（追記参照）、松川七郎は労作『ウィリアム・ペティ』の中[2]で「政治算術別論」の訳名で一度だけこの著作に言及しているが、これが『経済学批判』の註に挙げられた文献だと掴んだ書き方ではない。

マルクスはこれを、『人類増殖に関する試論うんぬん』[3]と挙げた。「第3版1686年、35～36ページ」と付しているから著書であることは判る。因にうんぬんは*etc.*である。ところが、C. H. ハルがペティ経済学の主要作を19世紀末に纏めた『ペティ経済学論集 Economic Writings of Sir William Petty』[4]には、この名どおりの著書はない。無論、etc.では別論とは訳せない。上の論集でそれらしい書名を探すと、“An ESSAY : Concerning the Multiplication of Mankind : together with another ESSAY in Political Arithmetick, Concerning the Growth of the City of London : with the Measures, Periods, Causes, and Consequence thereof”とあるのが見出せた[5]。この“another ESSAY”を松川は別論と訳し、マルクスは“together with another ESSAY”を*etc.*と略記したのである。

だが厄介はこれには留まらない。この書の中には、書名の「人類の増殖に関する試論」に相当する文章はなく、それに代わって「出版組合から読者へ（The Stationer to the Reader）」という断わり書きが数ページ分あるだけである。その後に、“of the Growth of the City of London”という題の本文が来る。言うまでもなくこれが「別論」である。つまりこの書は書名に当る本論部分の文章が欠落したままで、断わり書きと付論に当る「別論」とで出来ているのである[6]。実際、マルクスが挙げた時計製造における分業に関する事例はこの「政治算術別論」に含まれており、松川もミークによってこの「別論」が時計製造分業に触れていることを示していた。

因に上記の「読者への断わり書き」は言う。…以下のロンドン市の成長に関する試論は「もうひとつの試論」と題されているから、先行する他の試論があるはずだが見出せない。先行試論を精捜してみた結果、これが人類の成長、増加、増殖に関するもので、主題はロンドン市成長論に先行する自然秩序であるが、文章自体は入手できない。ただ、しばしばペティと交信していた一紳士から、ペティから寄せられた手紙の要約を示され、それが彼の構想を示すことは間違いないと思われるので、読者はそれで我慢してほしい…

その上でこの「構想」は14点挙げられるが、その11番目に「ものを考える人すべてに、聖書その他の正しい歴史によって全ての時代における世界人口、大都市人口を明示する」

とある。本稿の主題はここに予示してあるわけである。

この「政治算術別論」は1682年に書かれたと見得る。ペティの晩年である。『ペティ経済学論集』を編集したハルの概括によれば、ペティの経済学的著作は、執筆時期によって、1660年代の『租税貢納論』と「賢者には一言をもって足る」の第一群、1670年代の『アイルランドの政治的解剖』と『政治算術』の第二群、1880年代の「貨幣小論」、「政治算術別論」、「ダブリン死亡率表の考察」、「政治算術二論」、「ロンドンとローマの考察」、「政治算術五論」、「アイルランドの処理」の第三群に分かれる。後になるほど政治算術（統計）的関心が強まり、この方法の緻密化や適用範囲の拡大が試みられるが、経済学的内容は希薄になる[7]。この解釈については議論があるが、問題の「政治算術別論」が数字の操作に深入りする傾向のあった晩年の作であることは間違いあるまい。

2.「政治算術別論」の概要

この「政治算術別論」は、初めに「この議論の主要点」を12掲げ、ついで本論を展開し、終わりに補遺が付く構成になっている。まず主要点12を見ておく。

1．ロンドンは40年間で二倍になった。イングランド全体では360年かかった。

2．1682年にはロンドンに約67万人、イングランドとウェールズでは約740万人おり、土地は2800万エーカーだった。

3．人口倍増期間は、10年から1200年の間のいずれの期間でもあり得る。

4．ロンドンの人口増加は1800年以前に停止する。

5．聖書に示された人口の理解に役立つ表。

6．世界は来たる2000年のうちに人間で一杯になる。

7．公共善のための如何なる提案をも評価し得る12の試金石

8．ロンドン市を社会的な意味で無敵になし得る方法

9．宗教的統一の一助

10．人類の増加を現在の4倍に加速し得ること

11．疫病はロンドンの成長に対する主たる障壁であり妨害である

12．この件に関して正確な人口算定が必要であること。

この論点一覧から、当時まともな人口統計もなかったことや、ペストが繰り返し襲って

いたことなどの時代状況が判り、それ以上に、ペティの社会認識のあり方や数量的思考の振幅が窺えて興味深い。彼が人口増加を原理的にプラスと考えていたことも示されている。上記中の５（および６）が本稿にいう聖書人口学を指していることは改めて言うまでもない。

念のために注意しておくが、これは「別論」内容の要約ではない。この一覧から、ペティが「別論」で導出した諸結論は判るが、算出方法は全く判らないし、５の聖書人口学の中味も何一つ判らない。しかも原文ではその後に、全体の３分の１ほどの紙幅を費やして、ロンドン市の人口成長が40年間で倍増するほど著しく速い原因を、計12点挙げている。その第６番目が貿易の発達で、それと関わって製造業において分業の効用が特に大きいことを指摘するために、時計製造の例や地域間分業の効果を挙げている。マルクスが『経済学批判』の註で触れたのはこの箇所である。だが、上記の一覧には、ロンドン市急成長の原因は７、８、11あたりに抽象的に記されているものの、具体的には全く触れられていない。だから内容は別途見なければならない。

そこで肝心の聖書人口学にとって直接の前提になる部分をひととおり追っておく。まずロンドンを定義した後、市の成長としての人口増加を観察する。直接の人口統計がないから、ペティがかつてグラント（John Graunt 1620～1674）と協力して解析したとされる、死亡率表が手がかりになる。年々の死亡数はともかく記録されており、それが40年で倍増しているから、ロンドンの人口も40年で倍増したと見られる、と言うのが話の軸である。年々人口の30分の１が死ぬとすれば、総人口は近年の死亡数の30倍で67万人になる。この推計は、借家が84千戸あるから一戸８人住むとしてこちらでは人口672千人になる、と補強される。

イングランドとウエールズ全域については、課税額で見てロンドンは11分の１になるから、全域の人口はロンドンの11倍で7369千人。この比率は人頭税、煙突税、教会登録人数で補強出来る。全国の人口倍増期間については少し難しい。前掲の人口考察からは年々50人に１人死ぬことが判っており、近年の経験では死亡23に対して出生24の比である。これだと倍増に1200年かかることになる。例示すれば、600人いたとして年々12人死ぬ。出生24に対して死亡23の割りでは年々半人しか増えないから、倍増に1126年、ラウンドナンバーで1200年を要する。

別のもっと良い人口考察もある。農村でさえ年々の死亡は30ないし32人あたり１人、死亡４に対して出生５の比率である。人口600に対して年々死亡20出生25、増加は５人だから600人の120分の１。こうして、倍増期間が人口考察によって１対10にも開く。ここで追加すべきは、人口600に対して出生25、人口の24分の１だとしても、自然的可能性はその３倍の75に達することである。ある考察によると、人口600につき、15歳から44歳までの女性は180人、18歳から59歳の男性も同数だから、生産年齢の女性が２年に１度妊娠するとすれば出生は年90、病気・流産・発育不全計15を差し引いて出生数75。これは人口の８分の１である。さて人口600について出生75から死亡15を引くと年々60の増加、これは600人の10分の１だから、人口は10年で２倍になり得る。

だが10年と1200年では違いすぎるから中間値をとる。600人の人口で年々死亡を50人に１人と30人に１人の中間の40人に１人とし、死亡出産比は24対23と５対４の中間の10対９を採る。人口600人につき年々15人死に、16カ３分の２人産まれるとなるから、増加は年々１カ３分の２すなわち３分の５人。戦争や疾病や飢饉を含めて360年で倍増することになる。この倍増期間をイングランドとウェールズに適用すると、現在が740万人、エリザベス女王治世の初めの1560年には552万６千人、ノーマンコンクェスト時には200万人いたことになり、これはドゥームズデイ調査やヘール卿の『人類の由来』なるメモにてらしても判る。

360年で倍増とすると、学者が世界諸国を人口化の程度やある部分の計算によって合算したところでは現在32千万人だから、来たる2000年のうちに、世界人口はすべての居住可能地域の２エーカーにつき１人になり、聖書の予言に従えば戦争と虐殺が起こる。だから、イングランドとウェールズ全域については、10年倍増と1200年倍増の中間値として、便法だが360年倍増を採る。

ロンドンは67万人が40年倍増、全国では740万人が360年で倍増とすると、1840年にはロンドン人口が10.718.880人、全国人口が10.917.389人と起こりえない数値になるから、ロンドンの人口増は1800年までに5.359千人で止まるであろう。

さて、ここまでがこの「別論」の主題である、ロンドンの人口とその動態に関する推論である。この後に、本稿の主題である聖書人口学の記述が続き、そのさらに後に、ロンドン市の急成長の原因が列挙されるわけである[8]。

3．聖書人口学

世に聖書人口学という言葉があるかどうか知らない。むしろ今日風に歴史人口学と呼ぶ方が良いのかも知れない。しかしペティは、大まじめに聖書の人口に関する記述を利用し、それと自分の推計とを突き合わせ、結果として聖書の記述の信憑性を確認出来る、としているのである。さてその内容は…

10年倍増と1200年倍増とでは膨大な開きがあるから、古代人口について、聖書やその他良質の歴史記述に依拠する。ノアの方船で生き残った人間が８人[9]、彼等が10年倍増で増えると、100年後には8000人になる。洪水後350年、ノアが死んだころが100万人[10]、ここから現在1682年に32000万人。中間の計算はさほど難しくない。当初10年倍増、最後を1200年倍増とし、中間の成長は自由裁量とした、といっても聖書と考察によって正当化し得るようにした、後掲の表のようになる。われわれは、古代の都市・軍隊・植民地の大きさを良く知る歴史家がこの表を後日訂正するに委ねる。同時に、推計方法と倍増期間にかくも大きな違いがなければ（ママ）、聖書や他の確実な書物に書かれた数値に落着させることが不可能であることも認める。というのは、この目的のために全期間をつうじる好都合な数を一つ選ぶとすると、ラウンドナンバーで150年になるが、これによると、モーセのころ、洪水後800年では、世界に512人しかいないことになるのに、神が任じた正確な調査によれば、20歳以上のイスラエル人が603千人[11]おり、かつこの他に他の年齢層、部族、国民がいたことと整合しない。われわれの表ではこの時の総人口は12百万人である。

そして、ダビデの時、聖書の記述には、サタンの調査によって20歳以上のイスラエル人は1100千人[12]とあるのに、150年倍増では8000人にしかならない。それはわれわれの表では32百万になっている。キリストが産まれたころはアウグストスの時代で、ローマ帝国が偉大だった時代だが、150年倍増では百万人の４分の１にしかならない。しかしわれわれの表では１億人になっている。出エジプトからダビデの治世までが500年間、この間にイスラエル人だけで603千人から1100千人に増えていた。他方でもっと小さい数字、100年倍増を採ると、世界は700年来人口過剰になっていたはず[13]なのである。それゆえ単一の倍増期間を採ったのでは諸現象を説明し得ない。だからわれれは以下の表を作成するのにいくつかの数値を仮定した。これを歴史家が古代の各時点・各国そして世界の人口について発見

したところに従って訂正してくれることを、繰り返し希望しておく。

われわれは、全地球が最後の日に立つすべての人に必要なものを与え得ない、地表はかくも膨大な人数に立つ場を与え得ないと唱えて、われわれの復活信仰を揺るがそうとしている懐疑主義者に反対する文章を書くことで、いささかは信仰の一助となったはずである。現存の人口、世界の初めからの死んだ人口を確証することで、アイルランドの半分の土地でも総てが立ち墓に横たわるのに充分であることを示した。

世界人口の倍増期間表

倍増期間	洪水後年	人口	備考
10	1	8	大洪水
10	10	16	
	20	32	
…	…	…	
20	100	8000以上	
20	120	16千人	
20	140	32千人	
30	170	64千人	
40	200	128千人	
50	240	256千人	
60	290	512千人	
70	350	1百万人	ノア死
100	420	2百万人	
190	520	4百万人	
290	710	8百万人	
400	1000	16百万人	モーセの時代
550	1400（BC1300）	32百万人	およそダビデのころ
750	1950	64百万人	
1000	2700（AD 1）	128百万人	およそキリスト生誕のころ
300	3700（AD1000）	256百万人	
1200	4000（AD1300）	320百万人	現在―17世紀末

この表は、基本的にはペティが掲げたもの[14]をそのまま転写したものである。ただごく一部に、今日の非キリスト教徒にも読みやすくするための補充を加えてある。ここの数値は、全体として疑えばいくらでも疑えるものであって、おとぎ話と恣意的な仮定から合成した、数字のオアソビと呼べなくもない。多少論理に即して考えたとしても、倍増期間の

選択などは明らかに恣意的で、聖書の記述によって幾分制約したに過ぎず、また、聖書による年数の算定などは、聖書自身の記述の信憑性とペティによるその把握と双方に疑問を投じ得る[15]。

しかし他方、これが案外そのまま読み捨てられないところがある。

第一に、ヨーロッパ自体にまともな人口統計もない時代に、目的に役立つ数値の最大限確かなものを掻き集め、それを、近代的知性によって可能な限り明晰確実な論理で加工して世界人口史を構成して見せるという、いわばとてつもない企てだったことである。この種の企てが他にあったか否かを知らない。もっともこれは私の知識の範囲ではこれ以外に見出せないというだけである。だが他にあったとして、迷信や宗教的幻想とここまで離れた、人間総てを均質化して一人を数値の１とおいた上で行なわれた、透徹した歴史の推論がありえただろうか。

第二に、この表に掲げられた数値は、昨今の歴史人口学の成果[16]と予想外に接近している。因にマッケゥ”ディ＝ジョーンズの数値と対比して見ると、キリストが産まれたとされるAD１年では世界人口170百万に対してペティは128百万、AD1300年では360百万人に対してペティは320百万人だから、出発点も途中の推計もまるで異なるにしては驚くべき近さである。西暦紀元前の数値にはペティの手法ではあまり遡れないのだが、BC1000年がマッケウ”ディ＝ジョーンズでは５千万人、ペティでは洪水後1950年と1400年の中間の人口を採れば約５千万人だから、ここはもっと驚くべき近接である。他方、西暦紀元後になると、実際には人口増が加速されるのにペティは後になるほど減速しているから、かえってこちらでズレてくる。そもそもペティが当時の人口とする320百万はペティ自らの算出でなく、しかも誰に依拠したのかも明示してないので、確かさの程自体が判らない。

このペティの表は、現在ではそのまま使えるようなものではないが、古代についての推計が驚くべく正確なものだったことは印象に残る。手法だけで見るとこの結果は偶然だとしか言いようがないが、全く単なる偶然だったのだろうか？

さて、ここまで来ると、もともとの表題だった「人類の増殖に関する試論」とは、実はこの文章のことだったのではないかとの疑問が湧く。脱落ではなく、ペティによる表題の着け方が混乱したせいかも知れないのである。

4．ペティのメノコメトリクス

ウィリアム・ペティはまことに興味深い人物である。これまでろくに知らずにいたのが残念なくらいである。

ペティは普通、マルクスによる把握を公式化して、経済学と統計学の始祖として扱われる[17]。それはそれだけで大変なことなのだが、彼は実ははルネサンス人型の多彩な能力を持っており、その人生にとっては、こうした学問はほんの一部にすぎなかった。彼は何よりも実践の人だった。そこを詳論するつもりはないが、父親の営む機織業が破産して、グラマースクールへ出たくらいで船乗りになり、以後、めぼしい職業だけでも、海軍勤務、ライデン大学学生、発明家を経、ラテン語とギリシャ語に堪能なので、ホッブスやボイルやの学者グループに加わり、オクスフォード大学解剖学教授、グレシャム・カレッジ音楽教授に就いたのち、軍医としてアイルランドに渡り、そこで土地測量事業の中心となり、おそらくその関係で子孫を男爵・候爵に出来るほどの大地主になった。かつて、知ったか振りに、経済学者で金儲けしたのはリカードとケインズの二人だけだと書いたが[18]、とんだ不注意で、経済学などという学問の元祖に当るペティが、この二人をはるかに凌ぐ蓄財を遂げていたのである。

しかもペティは極度に筆まめな人だったらしく、こうした諸実践と関わる文章を膨大に残した。それは1899年にC.Hハルの編集で『サー・ウィリアム・ペティ経済学論集』に纏められ、別の文章が1927年に、子孫のランズダウンの手で『ペティ・ペーパー』[19]として纏められたばかりか、1993年に、それまで未公表だった手稿10000ページが大英図書館に買い取られた[20]。社会科学的著作として生前か死去直後に公刊されたのは、彼が書いたもののうちほんの一部に過ぎなかったわけである。

彼が書いた文章の全貌は私などには判りようがないが、これまで読んだ限りでは、文章は主としては実践に関わりその必要から書かれたものと見える。ラテン語の詩があったりするから、無論全部が実践文ではないが、実践性の強さは、通常経済学的著作として扱われるいくつかの文献についても見て取れる。松川七郎による邦訳のある『租税貢納論』、『政治算術』、『アイアランドの政治的解剖』、さらには「賢者には一言をもって足る」も「貨幣小論」も、いずれも強烈かつ具体的な政策提言を動機として書かれ、後世，経済理

論の端緒と見做されるなされるに至る部分は、政策的主張の説得性を高めるために書き込まれているのである。その代表例が、投下労働価値説の初発として扱われる、穀物も銀も生産し市場に持ってくるに要する労働が同じなら等価で交換されるという議論であるが、これは『租税貢納論』中の、地代を貨幣に換算する際に必要となった、「副次的」問題あるいは「余論」として説かれていたのである。

社会科学の形成過程でまず政策提言が現れ、やがて普遍化のために理論が形成されると言う限りでは、ペティは学問形成史の本道を進んだと言えるが、当面の主題からすれば、オマケの部分にすこぶる面白い議論が飛び出すのがペティの論述の特徴でもある。本稿で見た聖書人口学もその一例に他ならない。

マルクスはペティと内的に共鳴するところがあったと見え、各種の賛辞を呈している。『経済学批判』では、古典派経済学の冒頭に置いただけでなく、経済学を独立の科学とした、分業の把握がスミスより大規模だ、方法が独特だ、構想が天才的に大胆だ、文章に独創的なユーモアがある、とホメ続けた。もっとも、人物が軽薄で王に追従したと、非学問的なところでは悪口を加えることも忘れなかったが。同じく自ら出版した『資本論』第一巻では、ペティに対する読みがさらに深く正確になっているが、ペティへの言及が都合18回ほどあり、いずれも理論的な賞賛か依拠を示す引用である。ペティとマーチンを並べてスミスより良いと評した箇所もある。

このマルクスによるペティ賞賛は、いずれも有意義なものだが、一点抜けたところがある。それはペティの数量感覚の良さの評価である。

ペティが極めて優れた数量感覚の持ち主だったことはことは、前節までに示した「政治算術別論」の論述からも推察出来よう。確かな数値のないところでいわば次善の確かな数値を導き出す着想、部分的な数値操作に際して全体の結果を見通して加える制御、事態の全貌を大まかに数値的に把握出来る予感力。これに、数値を弄って結果を出すことを楽しむ感覚を付け加えるべきであろう。これらは、彼が何よりも、数値をいわば皮膚で感知するような、感性的直感的な能力を、桁外れに多く持ちあわせていたことを示している。実際、数値表現においても、彼は複利計算で年率〇〇％と数学的正確さを採るよりも、多少大まかでも何年で二倍といった直感的に理解可能な方法を採っている。数学を学んだ経歴もあるから、数学的表現力が低いから稚拙な方法しか採れなかったとは言えず、意図的に

感覚的表現を用いた可能性もある。逆に数学の知識が実際に乏しかったとすれば、乏しい範囲で最大限に数値的議論をするために倍増年数を使ったことになり、それが数値感覚の良さの現れだと言える。

だから算出した数値の正確さではキング（Gregory King, 1648～1712）に及ばず、後世にそのまま使える統計結果は残さなかったとしても[21]、ペティは社会や歴史の正当な把握を示し得たのである。いわば目の子勘定、メノコメトリクスの名人だった。これが彼を経済学並びに統計学の元祖たらしめたのである。

この数値感覚でペティと並ぶのはおそらくリカードである。とはいえリカードは生真面目で、数値を弄って楽しむというところは見当たらないが。他方、マルクスは数値操作に苦渋を感じていたように見える。彼の運算の叙述はいかにも重苦しい。おそらく彼は、数値感覚に劣るために、リカードをあれだけ研究しながら、究極の難問である比較生産費説に立ち入ることができず、『資本論』20章の混乱を残した[22]。同時にあれだけ評価したペティのこの大特徴を、把握できなかったか、素直に表現出来ずに終わったのである。

註

(1) マルクス『経済学批判』1859年、第一章A「商品の分析に関する学説史」中のペティ論に付された長い註。アドラツキー版では註(16)となっているが、全集版では通し番号がなく、ただの脚註である。大月書店『マルクスエンゲルス全集』13巻、37～39ページ。本文中の同書の訳文は、全集版の杉本俊朗訳による。なお馬場宏二「『経済学批判』の批判」の1を見よ。

(2) 松川七郎『ウィリアム・ペティ』、1967年岩波書店194ページ。

(3) 前掲『マルクスエンゲルス全集』13巻、37ページ上段。

(4) C. H. Hull ed., *Economic Writings of Sir William Petty,* 2 vols, Cambridge at the University Press, 1899. 大東文化大学図書館マン文庫所蔵。これは、ランズダウン編集の『ペティ・ペーパーズ』、ペティの『アイルランドの土地調査史』、フィッツモーリスによる伝記、サウスウェルへの書簡、『ペティ説批判的検討論集』とともに、Terence Hutchison Introduction の8巻本『ペティ著作集、*The Collected Works of Sir William Petty,* 1997, Routledge /Theomens Press』，の中に含められており、ページも同じである。

(5) *Economic Writings,* op. cit., vol.2, P. 451～478.

(6) マルクスが利用した同書第3版は、日本では見られそうにない。この種の書物を一番持っていそうな一橋大学社会科学古典資料センターに問い合わせたが、そこにもなく、ただ同センターの松尾恵子助手が、第2版を九州大学が所蔵していることを探し出してくれた。そこで九州大学の福留久大氏に第2版の概要を知らせてもらった。時計製造分業の記述は、第2版では37ページにある由。この件では松尾、福留両氏に謝意を

表したい。

(7) C. H. Hull, Pety's Place in the History of Economic Theory, *Quarterly Journal of Economics* vol.14, May 1900. ハチスン序『ペティ説批判的検討論集』はこの文章を転載しているが、目次で出所誌名を別の文章の出所 *Journal of Political Economy* と誤記している。この件でも松尾氏のお力を借りた。

(8) 念のために、ロンドン市成長の原因として挙げられた12の事態を簡単に列挙しておく。1．イギリスは外敵から守り易い。2．国内の党派対立による動乱が少ない、3．宗教的統一・平和の持続。4．裁判が公正に行なわれる。5．租税が公平で負担しやすい。6．貿易が製造業の発展を導き、都市を拡大させる。7．生活を喜ばしく美しくする製造業と技術の発展。8．市内の輸送交通が短距離で済む。9．乞食と泥棒を減らすことについて。10．実用教育の普及と改善について。11．世代ごとの人口増加には有意の差はない。12．最大の制約疾病について。

(9) ノアと3人の息子セム、ハム、ヤペテの4人とその妻たちの意味。創世記、第8章。私はキリスト教徒ではなく、そもそも聖書をきちんと通読したこともないから、この程度の記述なら何とか見当が付くが、ペティの記述から註(11)、(12)の該当箇所を発見するのにひと苦労した。註(13)は聖書解釈と言うより、ペティの文体をどこまで読み慣れたかによって解釈の適否が分かれそうである。註(15)の論点は当初全く見当がつかなかった。旧約でノアからアブラム（アブラハム)、新約でアブラハムからイエスまでと世代を数えてもせいぜい50代余り、1世代30年でも1500年にしかならない。

(10) ノアの死は創世記第9章にあるが、このあたりに人口統計が出てくるわけではない。100万人はペティ自らの表による数字であろう。

(11) 民数記略、第1章。

(12) 歴代志略上、第21章。

(13) ここがどういう計算による判断なのか明証できないが、一解釈を試みる。先の記述を参照すれば、ペティの当時の世界人口3億2千万人が、360年倍増で2000年経たとすれば32倍を超えるから、世界人口は1000億を上回る。2000年後に聖書の予言によって戦争と殺戮が起こると言うのは、1000億人が人口過剰だと考えていたためと解し得る。そこで、キリスト生誕のころ1億人いたとして、100年倍増なら1000年で1000倍。紀元1000年には1000億人になるから、ペティの時代から700年前に人口過剰に達する。こう考えていたのだとすれば辻褄は合う。

(14) *Economic Writings of Sir William Petty,* vol.2, P.468.

(15) 最大の問題は、ノアからキリストまでを2700年とする、上掲表の年数である。註(9)で見たように、聖書の記述からこの年数は直接には出て来そうにない。ペティ自身は文中で、モーセが洪水後800年、モーセからダビデが500年、と述べている。これが聖書に根拠のある年数か否か、あるいはペティのころそう解されていたのか否か、私には判らない。昨今見られる聖書年表には、モーセによる出エジプトがBC1280年、ダヴィデの治世がBC1000年とある（新共同訳『旧約聖書注解1』1996年、巻末年表）が、この種の年表にはノアの洪水までは登場しない。ただし、コメイの『旧約聖書人名辞典』原書1988年にはノアは紀元前2000年頃とあり、カルウ”ォコレシュ『聖書人名事典』原書1971年には、中近東洪水物語の代表例ギルガメシュがBC2700ころの人だとある。以上は、キリスト教社会福祉研究者坂本道子氏のご教示に従って、友人中山弘正氏の御好意で、明治学院大学所蔵の、『新聖書注解』等計6点を検討した結果である。坂本、中山両氏に感謝する。

(16) C. Mc Evedy, R, Jones, *Atlas of World population History,* 1978, Penguin Books.

(17) ハチソンは、ペティ経済学始祖説は疑わしいがペティがランズダウン、シェルバーン両家の始祖であることは間違いない、などと可笑しくもない冗句でマルクス批判をしたつもりでいる。cf. T. Hutchison, *Before Adam Smith,* 1988, p.29.

(18) 馬場宏二『マルクス経済学の活き方』2003年、御茶ノ水書房、第四章。

(19) 上記註(4)を見よ。

(20) Tony Aspromourgos, The New Light on the Economics of William Petty (1623-1687) : some findings from Previously undisclosed Manuscript,in *Political Economy* (2000) 19. この論文と次註に挙げる書物については、昨今のペティ研究の状況とともに、田淵太一氏に教えられた。なお、この未公表手稿が大英図書館に入る契機となったのは、松川七郎のランズダウン候爵家訪問にあったものと推測し得る。とりあえず S. MATSUKAWA, Sir William Petty : an unpublished manuscript, *Hitotsubashi Journal of Economics* vol.17, Feb. 1977 を見よ。ただし松川は訪問状況を具体的に叙述したわけではない。手稿公開については、杉本俊朗先生から貴重なこぼれ話を伺った結果、私が推測したのである。世代の離れたお二方からそれぞれに滅多にないご教示を得た。感謝の他はない。

(21) Tony Aspromourgos, *ON the Origins of Classical Economics,* Routledge, 1996, P.163.

(22) 馬場宏二「古典派の比較生産費説」大東文化大学経済研究所『経済研究』No.17、2004年３月。

追記：脱稿後しばらく経ってから、邦訳があったことに気付いた。鈴木信之訳「政治算術別論」法政大学大学院『経済学年誌』1983年。松川七郎の指導下に始められた由。表題は松川どおり。原文考証は松川流にがっちりした邦訳である。